

第3回 新IV族半導体ナノエレクトロニクス国際ワークショップ

本学電気通信研究所（以下、通研）のナノ・スピン実験施設（以下、実験施設）において、新IV族半導体ナノエレクトロニクス研究の最新研究動向に関する本ワークショップが2007年11月8～9日に開催されました（主催：実験施設、共催：本学電気情報系グローバルCOEプログラム「情報エレクトロニクスシステム教育研究拠点」）。通研からは組織委員長・プログラム委員長として室田淳一教授が、組織委員として末光眞希教授、櫻庭政夫准教授が参加しました。実験施設のナノエレクトロニクス国際共同研究拠点創出事業活動の一環として開催されたものでもあり、米国、ドイツ、フランス、ベルギー等の国内外（8ヶ国）の各国拠点代表者による招待講演17件とショート&ポスター講演20件の総数37件の講演（内、海外からの発表12件、東北大学の関係する発表10件）が行われ、総数64名（内、海外13名）の参加者を迎えて、新IV族半導体材料のプロセス技術及びナノデバイスへの応用までの幅広い領域について活発な議論が交わされました。世界規模での研究連携のきっかけとなることにより、世界の半導体産業の活性化を促すものと期待さ



れることから、本ワークショップの次年度継続開催（2008年）も決定されております。末筆ではありますが、本通研国際シンポジウムの開催にあたり、ご支援を賜った関係教職員各位に心より御礼を申し上げます。

（室田淳一、櫻庭政夫 記）

第1回 ナノ構造&ナノエレクトロニクス国際ワークショップ

電気通信研究所国際シンポジウム、The RIEC International Workshop on Nanostructures & Nanoelectronics（ナノ構造&ナノエレクトロニクス国際ワークショップ、主催責任者 教授 庭野道夫）が、平成19年11月21、22日の二日間にわたり、東北大学電気通信研究所ナノ・スピン実験施設で開催されました。本ワークショップは、近年高い関心を集めている種々のナノ構造体を取り上げ、その作製や応用について深く議論するために企画されたものです。日本を始めとして、アメリカ、ドイツ、シンガポールから招待講演者を招き、招待講演12件の他、一般講演4件が行われました。国内外から総数55名の参加者を迎え、カーボンナノチューブ、チタンナノチューブ、ポーラスシリコンといった種々のナノ構造体の物性や作製法、それらナノ構造体のエレクトロニクスデバイスやバイオセンサーへの応用といった幅広い領域について包括的に議論されました。次年度の継続開催（2008年）も決定され、最近めざましい進歩をとげているナノ構造体の作製とその応用について、最先端で活躍する研究者によって報告される予定です。末筆ではありますが、本通研国際ワークショップの開催にあたり、ご支援を賜った関係教職員各位に心より御礼を申し上げます。（庭野道夫 記）

第43回電気・情報系・通研駅伝大会 （第2回伊藤杯）報告

今年で第43回を迎える電気・情報系・通研駅伝大会が11月10日（土）に開催されました。前日の天気予報から雨模様が伝えられ、コース上で予定にない道路工事が行われるなど開催が危ぶまれる状況でしたが、予定を15分遅らせた10時45分には選手がスタートを切りました。オープン参加を含め55ものチームが参加したため、今年も非常に白熱したレースが繰り広げられました。

レース途中からは小雨がぱらつくようになり、気温も10度を切るという悪天候の中でしたが、選手一人一人からはそんな悪条件をものともしない熱気が感じられ、渾身の走りを見せてくれました。大会後のおでんも余計においしく感じられたことでしょう。

さて、雨中の激戦を制したのは加藤研究室でした。加藤研究室は去年惜しくも準優勝でしたが、今年は三連覇中であつた中沢研究室を下し、見事雪辱を晴らす結果となりました。主な成績は以下の通りです。傾向としては、



タイムが60分を切れるようになると10位以内を狙え、上位となるにはおそらく青葉山の一周を全員が7分台で走る必要があります。

閉会式は映像やBGMなどを用いて工夫を凝らした順位発表のもと、大いに盛り上がりました。印象に残った点として、上位のチームは必ず大勢の人数で表彰状を受け取りに行っていたことがあげられます。カップや賞品を抱え、全員が笑顔で写真撮影を始める様子などを見ると、団体競技において最も大事なものはやはりチー